



耳の奥に残るもの

1 1月の短編 1

m. suzuki

耳の奥に残るもの

「いろいろと……ごめんなさい」

テーブルに置かれた小さな花に目をやったまま、わたしはやっとの思いで何とかそう口にした。

つるりとした丸い形のグラスに生けられたピンク色の花は、ちょっとしたやるせなさや、ささやかな痛みや、そんなものを全部、簡単に引き受けてくれそうに見える。

「あらたまって、謝るようなことか？」

彼は一瞬驚いたような顔をしたが、すぐに微笑んだ。

それでも、そんな彼の顔をまともに見ることができず、わたしはまた、テーブルの花へと視線を落とした。

「言い争いをしたもの」

「争ってほど、大げさなものじゃない」

「でもわたし、いろいろ言ったし……」

「俺だって言った」

「それは……」

慌てて顔を上げたが、次に言うべき言葉が見つからず、今度は店の中へと視線を移した。

今日初めて入った店だった。それほど広くもなく、どこの街にでもあるようなありふれた喫茶店だったが、それぞれのテーブルにおかれた小さな花が店の人間の心遣いをそのまま表わしているようで、何度も来たことのある店のような居心地の良さを感じさせた。小さなグラスから垂れ下がるようにして咲いているそのささやかな花を見たときようやく、この数日の緊張が少しだけ、和らいでくれたような気がしたのだ。

「大丈夫か？」

彼は少し間を置いてから、さりげない口調でたずねた。そんないつもどおりの優しさが、今日は心に痛い。

「うん、何とか」

頷いて見せてから、しっとりとした木のテーブルに頬杖をついて、いくつかの空いている席を順に眺めた。

午後の中途半端な時間のせいか店内は空いている席のほうがずっと多く、それがかえって、ぼそぼそとした人の話し声を耳につくものにしてしまっている。言葉とも声ともつかない音が、寄せたり引いたりする波のように、店の中を自由に動き回っている。そんな音の合間を縫うようにして軽やかなピアノ曲が流れているのだが、音量をずいぶん絞ってあるせいで、話し声の波にまぎれて、時々消えてしまう。

わたしは意識して、話し声ではなく、ピアノの音のほうに耳を傾けるようにした。

「そうか」

彼が頷くとそこで、会話はまた途切れてしまった。遠慮がちにこちらをうかがう彼の顔が視界の隅に映ったが、空いてしまった間を、取り繕う言葉が見つからない。

二週間ぶりに会うのだから、もう少しまともな会話をすればいいと自分でも思う。でも、二週間前に自分の口から出てしまった言葉がまだ記憶に新しいのと、自分の中の一部分がすっかりしんとしてしまっているのとで、思うように言葉を選ぶことができない。以前のように、簡単に言葉が見つからない。

「向こうは、もう落ち着いた？」

「うん、だいたいね」

若い女性のウェイトレスが、カウンターを出てこちらに歩いてくるのが見えた。彼女は仕事を楽しいらしく、それが表情にも表われている。わたしは言いかけた言葉をいったん飲み込み、彼女の到着を待った。言葉というのはこうして飲み込んでしまうと、わざわざ口に出さずともいいのではないかと、そう思えてしまうから不思議だ。

「お待たせいたしました」

ウェイトレスはにこやかに言うと、彼の前にコーヒーを、わたしの前に紅茶を置いた。

「どうぞゆっくり」

そしてきちんとお辞儀をすると、またカウンターへと戻って行った。

彼女が行ってしまった後に、紅茶の香りとはまったく別の、柑橘系の香りがほのかに漂っていた。そういえば、さっき注文を取りに来たときも同じ香りがしていた。きっと、彼女が身につけている香りなのだろう。真っ白なミカンの花を連想させる、そんな香りだった。

「もう帰って来ないんじゃないかって、時々考えてたんだ」

コーヒーを一口飲んでから、彼が言った。

「え？」

驚いて彼の顔を見ると、困ったように微笑んで、こちらをまっすぐに見ていた。

「やだ、まさか、そんなわけじゃない」

向こうにいる間ずっと、こちらに戻ることをばかり考えていたのだ。あの街で暮らすことなど、微塵も頭をよぎらなかった。

結局わたしは、もうあの街の人間ではないのだ。たとえ根っこはあったとしても、それはもう、地中深く埋まってしまっているに違いない。

「そうだよな。うん、そうは思うんだけどさ……少しするとまた、帰って来ないかもしれないって、そんな風に思ってしまうんだ。まったく、変な話しだよな」

「そうよ、変よ。そんなはずないって、考えればすぐに判ることなのに」

運ばれてきた紅茶からは、ゆらゆらと湯気が立ちのぼっていた。皿のふちに置かれた輪切りのレモンが、見たこともない特別なもののよう、ひどく新鮮に見える。

帰って来てからというもの、どういうわけかいろいろなものがこんな見え方をする。当たり前で、取り立てて珍しくもないものが、特別で、とても重要なもののように見えてしまう。

「まったくだな」

彼は苦笑しながら頷くと、またコーヒーに口をつけた。

砂糖もミルクも入れない、濃くてとても苦いコーヒーが好きなのだ。甘いコーヒーは、コーヒーではないと言う。

苦笑のその向こうで、帰る帰らないで散々もめた一連のやり取りを、彼はたぶん思い出している。帰りたくないと言い張ったわたしを、最後に彼は、無理やり駅まで引きずって行ったのだ。

何にも知らないくせに。

おせっかい。

何度そんな言葉をぶつけたか知れない。でも彼は、一步も後に引かなかった。

帰って後悔するのはその場だけのことだ。でも帰らなかつたら、一生後悔するぞ。

結局、その言葉が決定打となった。

軽やかなピアノ曲が、つかの間しんとした店内に、踊り出すように流れた。どこかで聞いたようなメロディだと、その瞬間思った。

「何だっけ？」

「え？」

「この曲」

「ああ、『水の戯れ』。ラヴェルだ」

彼は流れてくるピアノ曲に耳を傾けてから、すぐにそう答えた。

「ラヴェル……どこかで聴いた気がする」

自分の中の記憶をたどったが、いつどこで聴いたものなのか、どうしても思い出すことができなかった。

「俺の部屋」

生真面目な口調だった。

「え？」

不意をつかれた気がして、少しうろたえた。

「冗談だよ」

彼は笑って、すぐに首を振った。

「……」

一瞬、忘れてはいけないものを忘れてしまっているのではないかと、そんなことを考えかけていた。

確かに、たった一度だけ彼の部屋に行ったことがある。でもそれは、ずいぶんと前の話だ。

「有名な曲だからな。どこかで聴いていたとしても、別におかしくない」

「そうなの」

両手でそっと包むようにすると、カップの温かさがじんわりと手の平に伝わってくる。いつの間にか、これを温かいと感じるような季節になってしまっていたのだ。窓の外を歩く人の中には早くも、厚手のコートを着た人が混じっている。マフラーをしている人さえいて、ほんの二週間だけなのに、ずいぶんと長い時間留守にしていたような気がする。

「音楽にまったく興味を持たない人間がいるなんて、いまだに信じられない」

彼はポケットからタバコを出すと、ゆっくりとした仕草で火をつけた。

「あなたには理解できないでしょうけれど、そういう人間も、世の中にはちゃんといるのよ。そ

れより、そんなものを吸い込んでおいしいと感じる人間がいることのほうが、よっぽど信じられないと思うけど」

わたしは手を伸ばすと、テーブルの端に置かれたタバコの箱を、指先で軽くはじいた。

「こればかりはしょうがない」

横を向いて煙を吐き出しながら、悪びれもせずに彼は言った。

「そのうち病気になるわよ」

「かもしれない」

「そうであっても、お見舞いになんて行ってあげないから」

病院独特の匂いや音が、まだ新しい記憶の中からよみがえった。同時にどうしようもないやるせなさがこみ上げてきて、それが顔に出てしまいそうで、慌てて紅茶に口をつけた。

わたしはコーヒーが苦手で、いつも紅茶ばかり飲んでいる。ほんの少しだけミルクを入れることもあるが、たいがいは何も入れない。

「……大変だったろ？」

何かを察したのか、彼は表情を引き締めると、低い声で言った。

「……」

とっさに、わたしは何も答えられなかった。

病院の大きな窓から見えたイチョウの木が、とても鮮やかな黄色の葉を絶え間なく揺らしていたことだけは良く憶えている。でもそれ以外のことは、半透明の幕でも隔てているようで、どこか心許ない。

大変だったのかもしれないし、そうではなかったのかもしれない。いったいどちらなのか、自分でもよくわからなかった。

「あんな風に無理に行かせてしまったけど、やっぱり、かえって辛い思いをしてるんじゃないかって、心配だった」

眉を寄せてタバコを吸い込む瞬間の顔は、わたしが一番見慣れている彼の顔だった。その顔を見るたびにいつも、向かい合って、一緒にいるのだということを実感する。

わたしは今確かに、この人と向かい合っている。

そう思うといつも、気持ちの波立ちがおさまっていく気がした。頼っているとは思いたくなかったが、こんな風に気軽に会えなくなってしまったらどうしようと、そんな不安が確かに、わたしの中にはある。

「……あっけなかった」

わたしはわざと、明るい口調で言った。

「思ったよりずっと、あっけなかった。それに、思ったよりずっと、きれいでもなかった」

病室の窓から見える大きなイチョウの木は、まるで黄色い炎が燃え立つように、目にまぶしいほどの色にその葉を染めつくしていた。根元にも同じ色の葉が隙間なく散っていて、まるで水面にイチョウが映っているかのように見えたのだ。水の中から、イチョウの木は立っているようだった。その様子を、日に何度見たか知れない。

「……」

黙ったまま彼は、火のついたタバコを灰皿に押し付けた。

「人が死ぬのなんて、思ったよりずっと簡単で、思ったよりずっと、あっという間なのね」

ほんの数時間前まで、少しずつではあったが、食事を取ることもできていたのだ。でも父のつま先は、いつの間にか青黒く変わってしまっていた。わたしはすぐそばにしながら、そのことにまったく気付かずにいた。父の呼吸があまりに穏やかで、眠っている横顔があまりにも優しいので、わたしはただ黙って、傍らに座っていただけだった。起こしてしまわないように、音も立てずに、ずっと静かにしていた。でもその間に父は少しずつ、遠い場所へと旅立つ準備を始めていたのだ。

あの時わたしがもっと早く気付いていれば、父はまだ生きていたかもしれない。

向こうにいる間、何度かそんなことを考えた。でもそのたびに、わたしはそんな考えを打ち消した。たとえわたしが気付いていたとしても、父に残された時間はもう、あらかた決まっていたのだ。

「そうか」

彼は神妙な顔で頷いたが、同意してくれたのかどうかまでは判らなかった。

「……ありがとう」

なかなか言えずにいた一言が、ようやく口をついた。

ちゃんと言わなければと、ずっと考えていた。彼に会ったらすぐに、ちゃんと言わなければと。でもいざ本人を目の前にすると、どうにもうまく切り出すことができなかった。

「ん？」

やはり唐突に聞こえたようで、彼は首を傾げて見せた。

「ほんの二、三日しか一緒にいられなかったけど、それでもよかった。もし間に合わなかったら、あなたの言うとおりに、後悔してたと思う。あの時無理やり駅に連れて行ってくれなかったら、わたし、一人じゃ絶対に決められなかったと思う。あなたのおかげ。少しだけど、最後に話しをすることもできたし……だから……ほんとうに、ありがとう」

忙しいということを口実に、父が入院したと知ってもずっと会わずにいた。母は一度も父を悪く言ったことはなかったが、それでもわたしの中には、奔放な父に対するわだかまりが、ずっとくすぶっていた。父を待って、父を心配して、そんな中で母が亡くなったのは、わたしがまだ高校生だったころのことだ。わたしはあえて遠く離れた大学を選び、そのまま実家とは疎遠になった。ずいぶん若い女性と父が再婚したのは、それから三年も経たないときだった。

一度にひとつのことしか、できない人なのよ。

口癖のように母が言っていた言葉は、その表情と一緒に今でもよく憶えている。社会に出て、仕事をして、いろいろな人がいるのだということはよく判った。それでも、母はもう少し幸せになることができたのではないかと、どうしてもそう思ってしまう。

「どういたしまして」

肩をすくめた彼の口調は、ひどく軽いものだった。

「もう、何だか力が抜けるなあ」

それでも、小さなつかえがひとつ取れたように、わたしは感じた。

「こっちのセリフだ。いつになくありがとうなんて、どう対処していいかわからない」

「ひどい言い方」

「本当のことだろ」

「感謝の気持ちのかけらもない、かわいげのないやつって言われてる気がする」

「たまにそうなる」

彼は言うと、大仰に頷いた。

周囲から聞こえてくるぼそぼそとした話し声は相変わらずだったが、軽やかなピアノ曲はいつの間にか、もっとずっとゆっくりしたテンポの曲に変わってしまっていた。

聞き取りにくいその旋律に、わたしはまた、じっと耳を傾けた。

「……そうね、あなたの言うとおりかもしれない」

そんな言葉が、つい口をついていた。

息を引き取る直前、わたしの顔を見た父が、驚いたように大きく目を見開いた。そして、いつもすまないと、弱々しい声で言った。わたしは何も答えなかった。わたしを通して母を見ていることには気付いていたが、わたしはあえて、何も答えずに、黙っていたのだ。

「おい、冗談だからな」

慌てたように身を乗り出してきた彼が、わたしの顔をのぞき込んだ。

「判ってるわよ、それぐらい」

微笑んで見せたつもりだったが、自分でも、少し引きつっているのが判った。

こんな風に向かい合って、初めて二人きりで話したのはいつのことだっただろうか。職場が同じで、ひとつ年上で、何となく気が合って、何となく話しが合って、そのうちに、二人きりで会うようになった。特別な感情が先に立っていたわけではなくて、本当に、ただそれだけのことだった。ただそれだけのことが、今日までこうして続いている。たった一度だけ彼の部屋を訪ねたことがあるが、中学生のカップルよろしく、手を握り合うことすらなかった。あるいはわたしが、そうさせたのかもしれない。

「何だかね、帰って来てからおかしいのよ」

音楽好きの彼の部屋には大きなステレオセットがでんと居座っていて、中古レコードやCDが、そこら中にあふれかえっていた。給料のほとんどをつぎ込んでしまうのだと、彼は笑いながら言った。何枚かレコードをかけてもらったことは憶えているが、間違いなく説明を受けたはずのその曲名を、わたしはすっかり忘れてしまっている。おそらくは、頭の上を素通りしてしまっていたのだろう。ここにわたしの居場所はないなと、そんなことを感じてしまえばなおさらだ。

「おかしい？」

「うん。何だかね、見慣れてるはずのものが、いつもと違って見えるの。何て言えばいいのかな……見た目は同じなんだけど、受ける印象が違うっていうか、とにかく、そんな感じ。すごく変な感じよ。このレモンさえ、無意味なくらい鮮やかに見えるんだから」

わたしは、皿の端に所在無げにのったままのレモンを見た。

「ふうん」

彼は眉の間にしわを寄せて頷いた。

「いい歳して、見るもの全部新鮮っていうのも変な話しよね。女子高生じゃあるまいし」

彼がどれほど熱心に音楽の話しをしても、わたしはどうしても、音楽に興味を持てなかった。嫌いというわけではないが、自分の行動範囲の端っこを、当たり障りなく流れていくものという程度の認識しか、持つことができなかったのだ。そんなわたしに、彼はいつも呆れていた。

彼の部屋にある大きなステレオセットは、わたしにしてみれば、心にのしかかったままの重石のようなものなのだ。

「もしかしたら、いい傾向なのかもな」

「いい傾向？」

「ああ。さっきから見ていると、珍しくピアノ曲に聞き入っているようだし」

からかうような口調だったが、不思議と腹は立たなかった。

「興味を持ったわけじゃないわよ。ただ、他の人の話し声が気になるだけ。だから、何か違う音に集中してきたいの。別にピアノじゃなくたって、セミの声だってカエルの声だって、何だっていいのよ」

「カエル……」

「そう。ニワトリでも何でもいい」

「ニワトリ……」

「そうよ」

わたしはわざと、大きく頷いて見せた。

葬儀の間中、集まった人たちのぼそぼそとした話し声が、いつもいつも聞こえ続けていた。座敷はもちろんのこと、縁側にいても台所にいても、どこからともなく話し声は聞こえた。夜になってもずっとそれは続き、その後も数日の間、止むことはなかった。そのうちに、一人で部屋にいても、耳の奥からその話し声が聞こえてくるようになってしまった。

「究極の音楽音痴にかかると、ピアノもカエルもニワトリも、全部同じ音になってしまうらしい」

悲しげな表情を作って、彼は大げさに首を振った。

「そうじゃなくて、ただ、音が耳に残ってしまって……」

「音が残る？」

「向こうじゃずっと誰かがいて、一人になるってことがほとんどなかったのよ。この二週間、いつもいつも誰かの話し声が聞こえてた。そんなのってあまりなかったことだから、何だか、いつまでもその話し声が耳に残ってしまって……」

弔問客が帰った後も、父の再婚相手が気をつかって、仕事のことや生活のことを、いろいろとたずねてくれた。最初のうちこそ律儀に答えてはいたものの、そのうちにわずらわしさが勝って、一時間でもいいから一人になりたいと、そう思うようになっていた。

「……」

彼は黙っていた。

「あなただっけと、そう思うわよ。一人でゆっくり音楽を聴く時間もなかったら、そのうちにきつとうんざりして、逃げ出したくなるわ」

一人でいた時間があまりにも長かったから、誰かと一緒にいることに対してつい、不自然さを感じてしまう。

「そうかもしれない」

彼もきっと同じだと、部屋に行ったあの日、すぐにそう思ってしまった。わたしにはわたしの世界があるように、彼には彼の世界がある。それを上手に混ぜ合わせられるほどの器用さを、どちらも持ち合わせていない。

「そうよ、きっと」

わたしはもう一度頬杖をつく、窓の外へと目を向けた。さっきよりも風が出てきたようで、通りに行く人たちの足取りが、心なしか速くなったように見える。

彼もコーヒーを飲みながら、黙ったまま、同じように外を見ていた。

黙ったままでいても、いつも平気だった。何も話さなくても、それでもずっと向かい合っていた。必要になればどちらかが口を開くとわかっていたし、必要でもないことを並べるほど、何かを求めているわけでもなかった。そもそもが隙間だらけの関係だから、それをいちいち言葉で埋めるようなことなど不毛だと、そんなことも考えていたような気がする。

でも今日はどういうわけか、彼が黙り込むと心が苦しくて、悪いことでもしているような気持ちになってしまう。

「冬ね、もうすぐ」

言わずに飲み込んだ言葉の中から、当たり障りのないものを引っ張り出した。

「ああ」

外を見たまま、彼は頷いた。

「寒いって、あまり好きじゃないのよね」

もう明日は帰るといふ日の夜、父の再婚相手はわたしに向かって、「来てくれて本当にありがとう」と言って深々と頭を下げた。微塵も血のつながりのないわたしなどに頭を下げるほど、この人は父を愛していたのだとあらためて思った。母も父を愛した一人であり、そしてこの人も父を愛した一人であり、理屈など超えたところに感情というものはあるのだと、そんなことを思った。

そして、どうでもいい言葉を並べることも時には必要なのかもしれないと、いつの間にか、そんなことも思い始めていた。一時間でもいいから一人になりたいのではなく、一時間でもいいから彼に会いたいと、本当はそう思っていたのだということにも気付いた。

「馬鹿みたいね」

つい涙が出そうになって、わたしは慌てて、少し曇り始めた空を見た。

眠っている父の傍らでじっとしていたときの、物音ひとつしない静けさが思い浮かんだ。どこまでもどこまでも静かで、もう二度と起き上がることのできない父と二人、世界の片隅に取り残されてしまったかのような感覚だった。

「知ってる」

「え？」

「寒いのが好きじゃないのも、馬鹿なのも」

「……」

言い返そうとして、涙が出た。

「疲れたろ？」

「……うん」

「ゆっくり休めばいいよ」

彼の手が、わたしの頬に触れた。

こんな風に彼がわたしに触れるのは初めてのことだったが、戸惑いはまったく感じなかった。それよりも、彼の手がこんなに温かいということに、どうして今まで気付かなかったのだろうと、そんなことを思った。

「まったく世話のやける」

わたしの内心を見透かしたように、彼が言った。

「いやならほっといてよ」

心にもないことを言って、鼻をすすった。

「明日は休みだしな、一緒にいてやるよ」

「恩着せがましい」

「じゃあ帰るぞ」

一瞬言葉に詰まって、そしてまた涙が出た。

「……一緒にいて」

両手で顔を覆ったその隙間からかろうじて言うと、「了解」という答えとともに、頭のとっぺんにぼんと手がのった。